

# 2013 年度 カブトガニ幼生調査結果

## 1 はじめに

カブトガニはその生活史を通して多様な沿岸環境を必要とし、人為活動によって生存が脅かされている代表的な生物であることから、沿岸生態系を保全する上での“象徴種”ととらえることができる。また、生きた化石としても知名度が高いカブトガニは環境教育の生物材料としても適している。

山口県では平生湾、千鳥浜、山口湾がカブトガニの主な繁殖地であるが、これらは本州最後の繁殖地である。中でも山口湾は現在最も繁殖状況が良いとされるものの、その生息数はよくわかっていない。榎野川河口域・干潟自然再生協議会は、生物多様性の確保を目指しており、2006 年から地域住民の方々と協働で希少生物としてのカブトガニ幼生についてモニタリング調査を行っている。

## 2 調査方法

カブトガニ幼生調査は、榎野川河口域・自然再生協議会カブトガニワーキンググループ(代表:カブトガニ研究懇話会 原田直宏先生)が中心となり実施した。

### (1) 調査場所

山口湾の干潟でも砂泥質であることから生息数が多い長浜、南潟においてカブトガニ幼生の調査を行った(図1)。

### (2) 調査手法

調査は、あらかじめ設定しておいたセンサスルート(調査ライン)上を歩いて、一定の範囲内(南潟A~E:5ブロック、長浜A~F:6ブロック)に出現するカブトガニ幼生について個体数を計数し、前体幅(図2)を記録した。調査ラインは南潟では60m間隔に5ライン、長浜では16m間隔に20ラインを設定した(図1)。

なお、カブトガニの幼生は慣れないと見つけることが困難なため、事前に研修を行った。

### (3) 調査日時

調査日は、南潟が9月5日、長浜は9月7日に予定していたが、9月7日は雨天のため延期し、9月20日に実施した。(9月7日はカブトガニ幼生観察会を開催)なお、平日で調査人数が足りなかったため、通常20ラインのところを17ライン(例年、比較的幼生の生息数が少ない1、3、5ラインを欠測)で調査した。

調査は干潮2時間前から開始し、約1時間で終了するようにした。これは幼生が干潮時刻頃には活動をやめ、泥に潜ってしまうためである。



図1 調査場所



図2 前体幅

### 3 調査結果

2006年から2013年のカブトガニ幼生の調査結果を図3に示す。

カブトガニ幼生は2006年の調査では651個体が確認されたが、徐々に減少し2010年には1/3の222個体まで減少した。しかし、2011年から増加し始め、2013年は2012年をさらに上回る1,752個体のカブトガニ幼生が確認できた。2013年も2012年と同様体幅15mm前後の4齢が多く、2012年に北側(Aエリア)に多く確認できたが、2013年は中心(C,Dエリア)で多く確認された。調査面積から算出した南潟、長浜の推定生息個体数は、2013年で約19,000個体であり、生息密度は約335個体/haであった。

本調査によって、全体の量を予測する上での個体数の分布概要を把握することができた。今後ともデータを蓄積していく予定である。

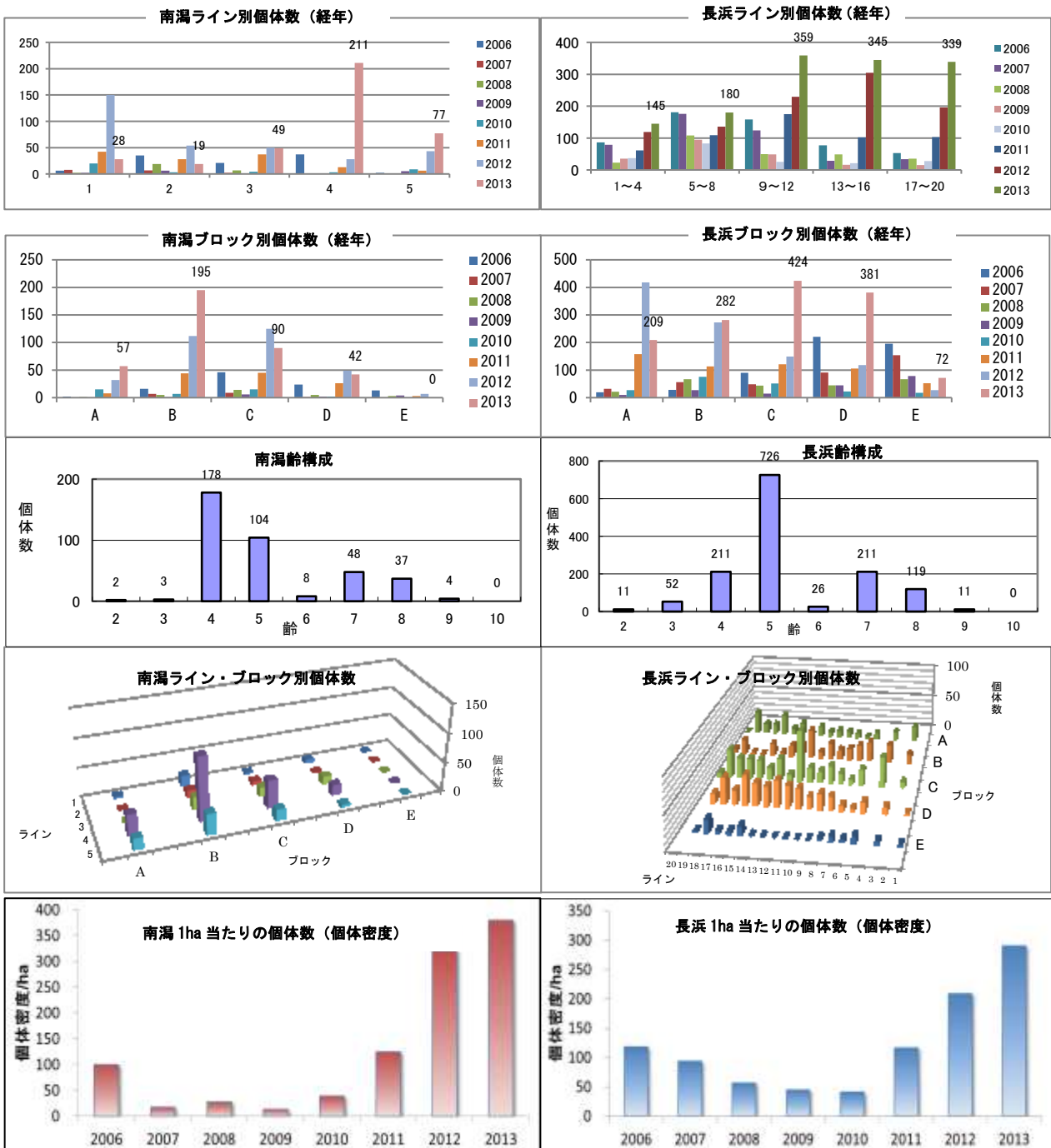


図3 調査結果